

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520432

研究課題名(和文) 魏晋における博物の学と賦学

研究課題名(英文) Encyclopedias and fu in Wei-Jin period

研究代表者

大平 幸代(OHIRA, Sachiyo)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：90351725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：魏晋時期には、博学であることが貴ばれた。中でも、異国や僻遠の地における奇異な事物に対する関心が高まり、それらを題材とした賦が作られたり、「異物志」や「博物志」などの書物が編纂されたりした。本研究では、「異物」がいかに記録されたかについて、三国から南北朝時期にかけての政治状況、神秘思想の潮流などに注目しながら考察した。また、「博物の君子」張華の逸話の変容を一例として、地方志や別伝の編纂状況の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：During the Wei-Jin period, bowu(encyclopedias) came to be valued. Among them, interest was high in those on strange things in foreign countries and other remote places. Fu were created on this topic, and books such as Yiwuzhi and Bowuzhi were compiled. In this research, the question of how the se yiwu(alien objects) were recorded is considered, while focusing on the political situation and trends in thinking on the mysterious from the Three Kingdoms period until the Northern and Southern Dynasties period. Also, with the transformation of the anecdotal writers of the erudite author Zhang Hua as an example, one part of the situation in terms of the compilation of local chronicles and personal biographies is clarified.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学 博物学 志怪 魏晋

1. 研究開始当初の背景

(1) 魏晋の時期に博物学が盛んになったことは、つとに知られている。近年、各種「異物志」や晋・張華『博物志』の整理・研究も進んでおり、それら「物」への関心が地理的興味と重なっていること、そこには政治的状況(領土意識、およびそこから生まれる世界観)の影響が少なくなかったであろうこともすでに指摘されている。

ただ、現存する資料が少なく、風俗・異物に関する情報がどのように伝達され、整理されたのかといった実態はいまだ明らかでない。この状況からさらに一步踏み込むためには、これまでの歴史・学術研究などで重視されてこなかった小賦、賛頌、雑伝、地理書などに見える「物」の記録を丹念に見てゆく必要がある。

(2) 従来、魏晋の文学作品と学術思想の融合については、玄学や清談(易、老莊に関する哲学的議論)との関わりを究明に重点が置かれ、すでに佐竹保子『西晋文学論』(汲古書院、2002)をはじめとした優れた研究の蓄積がある。確かに、「言は意を尽くすか」という命題は、文学創作の根幹にかかわる問いかけである。

だが、それと同時に、実際の賦作や賦注の場で、より切実な課題であったのは、語彙(知識量)の豊富さ、さらには未知の領域をも含めたこの世界の「物」をいかに把握し文字化するかという問題であったと思われる。より多くの「物」を識り、可能なかぎり書き尽くすことを目指す著述のあり方を明らかにすることにより、魏晋文学を複眼的に見ることができると思われる。

(3) 魏晋の注釈学については、古くは加賀栄治『中国古典解釈史 魏晋篇』(勁草書房、1988)があり、近年には古勝隆一『中国中古の学術』(研文出版、2006)のように優れた研究成果があるが、両書の主な考察対象は経書や子書であって、文学作品の注には軽くふれるのみである。文学著作の研究においては、程章燦『魏晋南北朝賦史』(江蘇古籍出版社、1992)に賦の注釈についての言及があるが、簡単な指摘にとどまっており、まだ検討の余地が残されている。

2. 研究の目的

魏晋時期に貴ばれた「博物の学」においては、地理(物産・風俗を含む)方面の知識が大きな比重を占めていた。この点については、すでに先行研究に指摘があるが、その博物地理学が文学作品に与えた影響についてはほとんど考察がなされていない。本研究はその缺を埋めんとするものであり、以下の三点において意義を有する。

(1) 魏晋の著述活動をより複合的に考察すること:

魏晋文学の特徴として必ず挙げられるのは、門閥貴族制と清談文化である。だが、清談の中心となった高門貴族以外に、文章や学問によって名を成そうとした無名の文人も多く存在しており、本研究で考察の対象とする賦の注釈や博物地理雑著の編纂を担っていたのは、まさに彼らであったと思われる。賦の注釈を多く含む『漢書』注に経歴不詳の注釈者が多いのも、比較的低位階層の文人が、博識を求められる注釈作業に従事していたことを示していよう。

このような階層差あるいは地域差への目配りが、当時の学術全体の構造を探るためには欠かせない。そして、その差異を明らかにするための手段として、博物の学とその表象としての文学作品(賦および賦注)の分析はきわめて有効だと思われる。

(2) 注釈学研究の範囲を文学作品にまで広めること:

漢代以来、賦には修辞の華麗さと風刺性・思想性が求められており、その表現手段として世にも稀なる事物がちりばめられていた。晋代の賦も、漢賦の伝統を受けつぎ、珍奇なものを敷き並べるが、漢代と大きく異なるのは、賦の中の事物一つ一つにまで根拠が求められるようになった点である。このような現象が起こった原因として、魏晋の文人の共有知の変化——版図の拡大や歴史的遺物の発見(未知の物との遭遇)を契機として、未知と既知との境界が揺るぎ始めたこと——があると考えられる。

後漢から東晋にかけての文学の変容を考える際に、学術思想との交錯は欠かせない要素である。だが、その交錯ポイントとして「物」への探求に焦点をあてた研究はこれまでなかった。この点において、賦の注釈(およびその資料となった方志など地方の記録)の研究は、賦学の進展に寄与するのみならず、魏晋文学の研究に新たな視座を与えるものとなる。

(3) 地方における著述活動を明らかにすること:

両晋南北朝には、江南の開発に伴い、多くの地方志が編纂された。編纂に参加したのは、地方の文人や地方に赴任した官僚であった。彼らが、その土地特有の事物や風俗をどのように記載したのか、記事内容にどのような意図が含まれていたのかを考察する。この考察により、地方における文士のネットワークや著述活動のあり方をできるかぎり明らかにしたい。

3. 研究の方法

(1) 魏から西晋にかけての博物学系著作の調査・整理:

①中国では近年、異物志や地方志の輯佚が進んでおり、劉緯毅『漢唐方志輯佚』(北京図書館出版社、1997)、吳永章『異物志輯佚校注』(広東人民出版社、2010)等の輯佚本が出版されている。ただし、これらの書も完全なものではない。そこで、先行研究を参照しつつ、増補作業をおこなうとともに、記述内容の検討を進める。これらの作業により、魏晉における「異物の学」(辺境の地の珍奇な事物の記録と考察)の状況を可能な限り明らかにする。

②魏晉の賦注にみえるモノについての注釈を整理する。その上で、引用される文献・書籍に注目し、魏晉南朝における博物知識がどのような書物によってもたらされたのかを明らかにする。また、モノのどのような面に関心が示され、どのように解釈されているのかを考察する。

(2) 地方の「異物」をめぐる語りの考察:

①地方における記録のありよう、すなわち、どのような人がいかなる意味をこめて記録したのかを、方志などの記述から読み取る。また、各時代の史書、別伝などの記述と比較しながら、視点や著述方法の違いを明らかにする。

②韻文(賦・贊)によるモノの神秘の表徴をさぐる。とくに、図や解説(あるいは注)による具象化と表裏の関係にある贊、賦がいかにモノの「神」を表現しようとしているのかを考察する。

4. 研究成果

(1) 「異物」の記録、その政治的意味および思想的意義の考察:

魏晉時期には、遠方からの朝貢の品が、しばしば賦・頌・贊など文学作品の題材となっており、また各地の珍奇な産物をめぐる議論もさかんに行われていた。本研究では、それら「異物」をめぐる著述活動の記録を収集整理し、そのうち「火浣布(石綿)」に焦点をあてた論稿を、「火浣布をめぐる言説—魏晉における「異物」の記録と語りの世界」として発表した。

本研究により、魏から晋にかけての「博物の学」の進展に、呉の南方政策およびそれに伴う「異物(遠方の珍しい産物)」の記録の増加が大きな役割を果たしていることが確認された。

また、実際に呉から南方(東南アジア)に派遣された使者の記録(康泰『吳時外国伝』)とその後に編纂された二次的な「異物志」(万震『南州異物志』など)を比べてみると、同一の産物について記述しながら、後者には中国の気候風土にあわせた解釈が付け加えられ、変質しているさまが見て取れた。

さらに、「異物の存在(真偽)」が議論の中心であった三国の時代に対し、東晋の葛洪や郭璞・干宝の頃になると、「異物が生まれる

原理」の探究へと関心が移っていることが指摘できた。その中間にあって、火浣布の存在を保証する権威となったのは、西晋期の張華『博物志』や傅玄『傅子』であった。その基礎の上に、東晋期になってモノの「神」に対する探究や議論が展開されるようになったのである。

なお、「火浣布」をめぐる説話には、魏の皇帝の見識の狭さを嘲笑するものが多い。これは、魏と呉における「異物」への関心や認識の差を象徴するものだと思われる。この認識の違いは、東晋以降の南朝における博識への志向、神秘的事象のとらえ方を考える上でも示唆的であろう。

(2) 「地方の事物に対する博識」を示す説話の成立および変容の考察

左思「三都賦」がつくられた西晋のころには、呉や蜀などの珍奇な事物をめぐる話が多数収集され、中央に集約されていったと推測される。その中でも、地方の名士の庇護者であった張華は、『博物志』の編者としても知られ、博物学の展開に大きな役割を果たしたものと思われる。しかし、『博物志』はすでに散佚しており、当時の状況も明らかにしたい。そこで、東晋以後における地方志や別伝中の「張華」像を検討することによって、地方で「張華と地方の名士をめぐる説話」がいかに語られ、変容していったのかを明らかにし、論稿「博物の士「張華」像のゆらぎ—雷煥とのかかわりをめぐって」(『叙説』40)として発表した。

雷煥の登場する話は、張華の博識ぶりを伝える説話群にあって特異な存在である。「晋の版図内のことはすべて知り尽くした博物の君子・張華が怪事や異物について解釈する」という図式が、張華説話の基調である。鄭子産にも比される有能な宰相ぶりを際立たせるのが張華の「博物」なのである。それに対し、雷煥の登場する話に限っては、モノをもたらずとも解説するのも雷煥の役割とされている。雷煥の地元(豫章)に対する知識が、張華の博学の缺を補うという図式をとっているのである。

本研究により、地方の名士・雷煥をめぐる逸話が、より著名で博学の象徴ともいえる張華の形象を巧みに利用しながら語られているさまが確認できた。豫章の「異物」および雷煥(豫章の事物についての)博識は、張華の名をかりてこそ世に広く認知されるのだ。

逆に、張華説話の展開からみれば、地方における張華像の潤色(超人化)が、張華説話をより荒唐無稽なものに変容させていったともいえる。雷煥・張華説話における、地方のヒトやモノを引き立たせる存在としての「張華」の脚色により、張華説話が本来もっていた枠組みが崩されはじめるのである。

なお、雷煥と張華をめぐる逸話は、雷次宗『豫章記』および『雷煥別伝』にみえるが、

『豫章記』にくらべ、『雷煥別伝』のほうがより潤色を加えられており、博識の術士同士の腕比べの観を呈していることが明らかとなった。別伝と地方志のかかわりについては、他の事例とも見比べながら、さらに検討する必要があり、今後の課題としたい。

(3) 地方志という言説空間の検討

地方における言説の記録の場としての「方志」に注目し、地方の名士や隠士と地方長官とのつながり、当地のモノや故事を記録する編者の意図について考察した。その成果（中間報告）として、六朝学会第26回例会にて、「晋宋の志怪と地方の伝承—廟墓にこめられた願い、雷次宗『豫章記』など荆楚の方志を事例として」と題する口頭発表をおこなった。

雷次宗は、廬山で慧遠に師事し礼学をおさめたこと、隠士として建康に招かれ儒学を教授したことで知られている。本発表では、雷次宗と豫章太守とのつながりを指摘し、著名な隠士・文士の地方での位置づけについて見解を述べた。

また、雷次宗『豫章記』や鄧徳明『南康記』に記された廟墓をめぐる説話から、郷里の名士や太守を顕彰するものとしての地方志のやくわりについて指摘した。この方面については、すでに歴史学からのアプローチがあり、先賢伝や耆旧伝について論じた永田拓治「先賢伝」「耆旧伝」の歴史的 성격（『中国一社会と文化』21、2006）等、一連の論稿に詳述されている。それらを参照しながら、人物伝だけでなく、地方の山水や物産に関する記事にも目をくぼり、地方志の文章表現や他ジャンルへの影響について、今後も考察を進めたい。

なお、雷次宗やその弟子をめぐる逸話の展開についても、初歩的な見解をのべたが、これについては、後世の雷次宗像の展開とあわせて、さらなる検討を行う必要がある。

(4) 荆楚における山水と志怪の交錯

長江中流域の荆楚地方においては、先賢伝や異物志にやや遅れて、山水や物産・異聞などを記す地理書が盛んに編纂されるようになった。なかでも、東晋から劉宋にかけての時期には、数が増加するだけでなく、その後の地方志の基礎となる著述スタイルが形成されたと思われる。注目すべきは、地理書の編纂に地方の著名文人が深くかかわっており、地方行政をになう官吏たちの活動が、記事の収集と密接な関係を有している点である。

本研究期間内には、晋宋期に編まれた荆楚の地理書のうち、羅含『湘中記』、王歆之『南康記』、鄧徳明『南康記』、雷次宗『豫章記』、王歆之『始興記』、盛弘之『荊州記』などについて、収集整理を行った。さらに、これらの書にみえる山水および怪異の描写が志怪書にとりいれられていくさまについて考察

した。この結果については、引き続き補足・検討したうえで、公表する予定である。

上記のとおり、本研究期間における考察の中心は、三国から東晋にかけての「異物」に対する認識および記述の変容、地方における博物説話の検討に重点を置いたものとなった。そのため、博物説話の時代・地域による差異、地方（とりわけ荆楚地域）における博物者（地方の名士）の語られ方、地方における語り（あるいは記録）の担い手に関する問題については、一定の成果を公表できた。一方、賦やその注釈学における博物学の影響についてはははまだ論稿を発表する段階には至っておらず、資料整理に留まっている。これらの問題については、本研究を継続発展させる形の研究課題「晋宋における博物地理認識と文章表現」（基盤研究（C）、平成26年度～29年度）において、引き続き検討する。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

①莫砺鋒著／緑川英樹・大平幸代訳注、『莫砺鋒詩話「雨」「雪」』訳注、『颯風』、査読無、52号、2014、pp. 55-85

②大平幸代、博物の士「張華」像のゆらぎ—雷煥とのかかわりをめぐって、『叙説』、査読無、40号、2013、pp. 252-269
<http://hdl.handle.net/10935/3377>

③莫砺鋒著／緑川英樹・大平幸代訳注、『莫砺鋒詩話「黄昏」「月」』訳注、『颯風』、査読無、51号、2012、pp. 35-64

④莫砺鋒著／緑川英樹・大平幸代訳注、『莫砺鋒詩話「中秋」「除夜」』訳注、『颯風』、査読無、50号、2012、pp. 39-56

⑤大平幸代、火浣布をめぐる言説—魏晋における「異物」の記録と語りの世界、『奈良女子大学文学部 研究教育年報』、査読無、8号、2011年、pp. 一～十二
<http://hdl.handle.net/10935/3053>

〔学会発表〕（計1件）

①大平幸代、晋宋の志怪と地方の伝承—廟墓にこめられた願い、雷次宗『豫章記』など荆楚の方志を事例として、六朝学会第26回例会、2013年3月16日、県立広島大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大平 幸代 (OHIRA, Sachiyo)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：90351725